

Title	<批評・紹介>前嶋信次著「東西文化交流の諸相」
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	東洋史研究 (1972), 30(4): 446-453
Issue Date	1972-03-30
URL	https://doi.org/10.14989/152844
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

批評・紹介

東西文化交流の諸相

前嶋 信次 著

昭和四十六年三月 東京 慶應義塾大學
A5判 一二三四頁

前嶋信次先生が四十六年三月に慶應義塾大學文學部教授を停年退官される記念として同學東洋史研究室から刊行されたのが本書である。本書は著者が今までに發表してこられた論考のうち、東西交渉史に關するもの三十七編を収録し、それに序言と、著者の學問的自傳ともいふべき「迂遠の途を辿り來て」と、著作目録を載せ、一二三四頁に及ぶ大冊である。御壯健に停年をお迎えになつた前嶋先生にお慶びを申し上げるとともに、本書刊行關係者の努力に敬意を表したい。

私は今まで何度か先生の溫容に接し、慈父の暖かみを感じたことがある。また世界ノンフィクション全集の中で私がスウェーデンの「トランス・ヒマラヤ」を譯した際には、レオンス・ペイヤール「マジエランの世界一周」、チャールズ・ダウティ「アラビア砂漠」とともに一冊となり、その解説を先生が執筆して下さった。

さて本書の出版を私を知つたのは、日本オリエント學會誌「オリエント」においてであった。そこで本書の目次の一部の紹介を見て、

すぐに次の二篇に期待した。その一は「閩書と閩書抄」である。これは「神田博士還曆記念書誌學論集」に發表されたものである。著者と神田博士との縁は兩者の臺灣在任中に結ばれたものであろう。閩書という名をはじめ私が知つたのは、故安部健夫先生の講義ノートを整理しているうちに、蒙古・元朝の税制に税糧と科差とがあり、科差の説明として「以丁力多寡科差。兼論資産」という文句が閩書版籍志から引用されているのを見たときである。閩書とは、どんな本かと、手もとにあるアジア歴史事典や京大人文科學研究所漢籍目録を見たが、出ていない。安部先生は閩書版籍志を古今圖書集成經濟彙編食貨典賦役部總論から引いている。では閩書の全容はどんなものなのか。前嶋先生によれば、閩書とは福建地方の地志で、編者は何喬遠、明末の嘉靖から崇禎にかけての人である。この閩書一五四卷については前嶋先生の指摘どおり、四庫全書總目卷七四史部地理類存目に解説がある。それを見ると、この本は分野・方域・建置・風俗・版籍・扞圍・前帝・君長・文莅・武軍・英舊・方技・宜寺・方外・閩閩・島夷・靈祀・祥異・萑葦・南産・著徳・我私の二十二門に分かれるが「其標目詭異。多乖志例」とある。安部博士が科差の説明に閩書から引いたことがやや唐突に私には感ぜられたが、安部博士も同じことを考えられたのか、その後の論文には閩書を使っておられないようである。

次に私が期待したのは「忽烈福密副使博羅考」である。この題目を「オリエント」で見たとき、私は著者が博羅をプーランド・チンサンに結びつけているのではないかと豫測したところ、本書を手にして果たしてそのとおりでることがわかった。私はベルシア語によるモンゴル史の重要な文獻であるラシードウッディンの『ジャ

「ミウツワリフ」(集史または年代記彙集)をめぐって見たことがある。ラシードがどのようにしてこの本を著わしたかについては、てっとりばやくはドーソンによる著書、即ち田中萃一郎譯『蒙古史』または佐口透譯『モンゴル帝國史』の序論にある文獻解題を見ればよい。そこには「ベルシアのモンゴル・カンの古文庫には、モンゴル文字で書かれたモンゴル語の由緒正しい史料が秘藏せられていた。しかし、これを讀解する能力を備えた者はまれであった。これらの史料を公けにするために、スルターン・マフムード・ガーザン・カン(イル・カン國第七代の君主)はこれに基づいて歴史集を編纂しようとして、七〇二年にアブル・ハイルの子で醫師ラシードという異名を持つハマダーン市出身の一奴僕フズルウッラーにこの仕事を委ね、勅命を下してこれらの史料の不備を補うために、宮廷に仕えていた中國・インド・ウイグル・キプチャクおよびそのほかの國の學者に諮問し、ことにトルコ諸民族の起源と歴史、とくにモンゴル族のそれについて誰よりもよく知っている大ノヤン、元帥および王國の行政官(イル・カン國における元朝大カンの代官)であるプーラード・チンサン(丞相)に諮問するように命じた。この著作は重要な事實を記憶にとどめておくことを目的とし、現今、一世紀以前の出來事を知る者はほとんどなく、モンゴルの青年貴族の大多數がその祖先の姓名、系譜、武勳を知らないだけに、ますます必要なものであった。……この勅命を奉じて、私は注意深く、批評眼をもって、古文書庫に保存されている記録を調査し、スルターン・ガーザンの宮廷に仕える諸國の學者が提供した情報によって、その不十分な點を補ったのち、私はこの歴史を執筆したが、私はとくに敘述の筋道と明晰さに重點をおいた」とある。

(佐口譯による。「」の中は譯者の説明)。これはラシードの筆による序文をドーソンが譯して載せた部分である。

私の問題は、プーラード・チンサンがどのような資格でイル・カン國に來ていたか、言いかえれば、元朝とイル・カン國がどんな關係であったか、ということであった。イル・カン國が元朝をチンギス・カンの後繼者として尊重していたことは確かである。しかしこの兩者は上下の關係にあつたのであろうか。プーラード・チンサンの立場が佐口氏の説明のように「代官」というようなものであれば、上下關係を思わせるが、私の感じでは、それほどではなく、水平の關係で、元朝がイル・カン國よりやや上であつたように思えるが、いかがであらうか。

このように元朝とイル・カン國との關係に重要な役割を演じていたプーラード・チンサンについては、やはり西方の史料として『ワツサーフ史』に、イル・カン國における鈔の發行が彼の提案による旨の記載がある。では東方の史料ではどうか。例えば『元史』にプーラード・チンサンについての記載はあるだろうか。私は考えた。プーラードという發音なら、ボラ、またはボロという音の漢字で表記されているであらう。こういう場合、京大文學部編『元史語彙集成』が役に立つ。それらしい漢字の人物で、時代が世祖か成宗の頃の人の名を、二、三人書き出したところで、私はこの問題の追求を中止していた時、前嶋先生のこの論文を見た次第である。

本論文では忽必烈樞密副使博羅とは何者かという問題から出發している。まず先人の説として、博羅をポーロ、即ちマルコ・ポーロなりとするものが紹介されている。しかしこの説のちに否定されている。著者はこういふ「私はかねて元の世祖朝の樞密副使字羅の

事蹟に興味を持ち、これに關する史料を蒐集したが、ふと波斯史家の Pulad Chingsang と結び付きはしないかと考えた。然し先人の研究を検するに従い、自分の發見と思つた事も多くは既に云われた事であり、殊に李羅とプーラードとを結び附ける意見は早くペリオ氏が道破している事を知つた。しかしペ氏は後にその一部に疑問を抱くに至つたので、これに對する卑見を述べることとしたのである。そして「ペリオ氏の最初の考が正しく、後に抱いた疑問は不要であつた」として、プーラード・チンサン即ち樞密副使李羅の説を確認する。またこの李羅について誰も利用していない史料として、文天祥の紀年録を引き、彼が大都に護送されて、火の出るような激しい大義名分論争を交した相手、博羅丞相も、このプーラード・チンサンであるとする。

プーラードはチンギス・カンと同じく、モンゴル族のールンに屬し、ドルベン氏の出、父ブレキはバウルチ、即ち大膳職としてチンギス・カンに仕えた人である。プーラードについてはさほど詳しいことはわからない。元史にも傳は立てられていない。もし彼の記録があつて、文天祥との議論のさまや、ラシドドゥッディンのこと、ガーザーン・カンのことなどがわかつたら、モンゴル史の醍醐味を満喫することができたであらう。

「泉州の波斯人と蒲壽庚」蒲壽庚といへば日本の東洋史家は誰でも桑原隲藏博士の『宋末の提擧市舶西域人蒲壽庚の事蹟』を思い出す。前嶋論文もこの桑原著書から出發して、これに多數の史料と若干の批判を附け加えようとするものである。なお蒲壽庚がアラビヤ人であるという説を最初に發表したのは藤田豊八博士で、大正二年十一月のことであり、桑原博士はこれとは全く獨立に、三年十二月

に同じ説を提出された由である。

先に問題にした閩書は桑原博士の所論の重要な文献としてしばしば引用されている。即ち同博士によれば「蒲壽庚の事蹟を調査するのに、彼の血統のことを傳えた第一の古い材料は、南宋の遺民の鄭所南の『心史』である。」「心史』には蒲壽庚を蒲受昉に作つて、その祖は南蕃人なりと記してある。明末の何喬遠の『閩書』には、蒲壽庚の事蹟を一番詳細に記載してあるが、それには彼の祖先を西域人と認めて居る。或は南蕃人といひ、或は西域人といひ。何れにしても蒲壽庚はもと外國産であるべきは疑を容れぬ。吾が輩は更に彼の姓を蒲と稱する點から推測して、蒲壽庚は蓋しアラブ人即ちイスラム教徒であらうと斷定する。支那の記録に見えて居る外國人の姓に蒲とあるのは、アラブ人の名乘に普通な Abu (Abou) の音を表わしたものであらうという説は、今より二十餘年前に、獨逸のヒルト氏の唱へ出した所であるが、吾が輩はこの蒲壽庚の蒲も同様と認めた」といふ。なお蒲壽庚の祖先についての閩書と心史の文章はそれぞれ次のとおりである。

蒲壽庚其先西域人。總諸蕃互市。居廣州。至壽庚父開宗。徙于泉。(閩書)

蒲受昉。祖南蕃人。富甲兩廣。據泉州叛。(心史)

これに對して前嶋論文はこういふ。「果して蒲壽庚はアラブ人であつたらうか。遺憾ながら博士の所論を見るに、そう斷定すべき確たる根據はない。私は彼をもつて、むしろベルシャ系とする考を持つている。』そして自説の根據となる多くの史料を提示したのち、本論文のしめくくりとして次の言葉で結ぶ。「本稿の如きは、もとより名著『蒲壽庚の事蹟』に啓發されたもの、首尾一貫してこれに

依存したものである。決してその謬を正すなど云う僭越な態度をとるものではない。極めて徐々とながら、わが國の西アジア研究も歩を進めているので、時代と共に生じて來た若干の異説を敢てここに呈示して見たのである。」

蒲壽庚をもってベルシヤ系とする説の確かさの度合いについては、前嶋論文では「蒲壽庚をベルシヤ系の人と断定する明確な史料は、今の所ないけれども、泉州のベルシヤ人を主とする外人居留民の性質から見て、それを背景に興つた西域人蒲壽庚は、アラビヤ人とするよりは、ベルシヤ人とした方が妥當である」と述べている。

では泉州の外人居留民はどのようであつたか。本論文のあげる實例のひとつは、羽田亨博士の紹介で有名ないわゆる南蠻文字である。同博士の論文「日本に傳わる波斯文に就て」と、南蠻文字の寫眞は、『羽田博士史學論文集』下巻に收められている。この文書にはベルシヤ語の四行詩一首と、漢字の書き入れがあり、「爾時大宋嘉定十年丁丑於泉州記之」の文字が見られる。これは鎌倉時代の僧慶政が入宋し、泉州にいた時、ベルシヤ灣から來た商船の乗員と相識り、別れに臨んで異國人の署名を求めたところ、この詩が書き與えられたものであらう。嘉定十年（一二一七）の泉州にベルシヤ人の來航していた證據である。

またファールス地方のベルシヤ灣に臨む海港シーラーフは、インドや中國へ向かう商船の出發港であつた。そして「シーラーフ出身の人」Shilawiと云ふ名をもつ商人が泉州に居留していた。

また泉州のイスラム寺院である清淨寺にアラビア語碑文があり

Haji Rukn (Ged-Din) ash-Shirazi

の名が見える。これはシーラーズ出身者であり、またメッカ巡禮を

した人であることが、この名前からわかる。

またイブン・バットゥータの旅行記に、ザイトゥーン、即ち泉州の長老の一人として

Shaikh Burhan ad-Din al-Kazirni

の名が見える。この人はシーラーズからベルシヤ灣へ出る途中の町カージルーンの出身である。また次の二名の名も擧げられている。

Taj ad-Din al-Arduwili

Kamal ad-Din 'Abdullah al-Israhani

前者はアルダビールの人、後者はイスファハーンの人である。またこの旅行記に續いて現われる

Sharaf ad-Din at-Tabrizi

はタブリーズ出身である。

さらにまた清淨寺のアラビア語刻文に見える名前として

Bahā' ad-Din 'Umar bin Ahmad al-'Alami at-Tabrizi

Shams ad-Din Muhammad bin Rukn (or Zain) ad-Din at-

Tabrizi

があり、いずれもタブリーズ出身者である。

清淨寺のアラビア語刻文の研究としては、一九一一年の「通報」にスペインの神父アルナイスとスイスのイスラム金石文研究家ファン・ベルヘム博士の協力になる論文がある由である。前者の現地調査資料にもとづいて後者が研究解讀したものである。前嶋論文は「通報」論文から次のような紹介をしている。興味があるので引用する。

アルナイス神父は靈山の先賢塚から少しく下つた所で、二面のアラビア語碑文を發見した。その一つは下部が失われて、僅に五

文字を残すのみであったが、ナスヒー書體で割合に読み易く刻してあり、ファン・ベルヘム博士は次の如く讀んでゐる。

Hadhā Qabr Khudhādār (or Khudhādād) an-Nasrīni al-Ganjāyī

右Qらや khudhādār は確に khudādār (Theodore または Dēdatr のヘルシヤ語の形) であるとし「この墓はガンジヤの人、キリスト教徒たるフダダール(のもの)……」と解したのである。ガンジヤはアラビア語地理書には Jannah として出てくる。カスピ海岸のバクーから西の方アルメニアに向う途中、グクチャ湖の東方にあつて、今では Elizabetpol の名でよく知られている。その邊をアッラーン Arrian 地方と言ふ。アルメニアとも關係が深い所であるが、名前から見ても、これも恐らくベルシヤ人であろう。またこの墓の主がキリスト教徒であることは特に注意すべきである。ファン・ベルヘム博士は「これにより、キリスト教徒のコロニーでも、その死者はイスラム教徒と同じ墓地に葬つたものと見える」と言つてゐる。

これはたしかに面白い記事である。これにもとづいて私の推測を述べてみよう。この墓の主はアルメニア人であつた。アルメニア人はキリスト教のアルメニア教會に屬する。その母語はアルメニア語である。彼らはまたベルシヤ語やアラビア語にも堪能であつた。このアルメニア人は單身で泉州に居留し、アラビヤ人やベルシヤ人と親交を保つてゐた。彼は突然この地で客死した。身よりはなない。そこでイスラム教徒の友人たちが彼をイスラム墓地に葬つてやり、アラビア語で墓碑銘を書いた。「これはガンジヤの人、キリスト教徒、神から與えられたる者の墓なり」と。

ファン・ベルヘムは khudhādār と讀むべきか、khudhādād とすべきか迷つたようだが、これはベルシヤ語で、後者が正しいであらう。また「神」を意味する khudha は、普通には khuda と綴られる。khudādād とは「神から與えられたる者」の意で、これはこのアルメニア人の固有名詞ではなく、ベルシヤ系の友人が彼に捧げた稱號ではあるまいか。

もし泉州にアルメニア人が多數いたとするなら、彼らは彼ら自身の墓地をもち、その墓碑も碑銘も彼ら獨自のものを持つたはずであるがどうであらうか。

このほか泉州在留外人に關する豊富な史料が紹介されて、大變有益である。しかしながら前嶋先生の所論に私はやや不安を感じる點がある。それは「アラブ族とベルシヤ人(イラン族)とは西アジアに對立する二大民族であつて、この兩者を混同することは許されない。」「イスラム文化に關係した研究に、イラン族とアラブ族の區別を輕視することは大きな錯誤である」という強い語調である。

では「アラブ族」とは何か、「イラン族」とは何か、その定義はどうなるであらうか。本論文に引用されている人名がベルシヤのものとしてゐる根據は、その出身地がイラン王國の領内にあるといふことのようにである。ではイラン王國領内に住む者、住んだ者はすべてベルシヤ人といつてよいかどうか、私はかなり疑問に思ふ。

「カンダリード」という人をもシカンダハールの人とするなら、そしてその出身によつて國籍を決めるなら、彼はベルシヤ人でなく、アフガン人である。泉州で港のことを「バンダル」とベルシヤ語で呼ぶ人があつたようである。彼の母語はベルシヤ語であつたらう。それなら大變ベルシヤ的である。しかしベルシヤ語を母語としてい

でも、トルコやアラブからの移住民でないとは保證できない。

西アジアでは人種の移住や混血が甚だしい。それに言語や宗教も複雑である。「ベルシア人」「アラブ人」の内容は「日本人」ほど單純ではない。

蒲壽庚がベルシア人であったかアラブ人であったかを強いて區別しようとするれば、彼の母語が何であったかが一應の指標にならうが、その史料はあるだろうか。蒲姓の風習として中國人の目についたのは、桑原著書によれば

一、清淨を尙ふこと

二、殿堂を設けて禮拜祈福するけれども、決して偶像を設けぬこと

三、食事する際には必ず一方の手のみを使用して、他の一方の手は使用の時に使用する外決して食事に使用せぬこと

四、その使用する文字は異様で、中國の篆書、籀文の如き形をなして居ること

である。四はアラビア文字を指している。この四項ともイスラム教徒の風習であつて、アラブ人とベルシア人に共通である。兩者の區別は當時の中國人にはわからなかつた、桑原博士もしたがつてアラブ人とベルシア人を區別しなかつた、と私は考へたい。

「テリアカ考」テリアカとは多種の珍らしい藥物を煉り合わせた解毒劑で、ギリシア人が發明し、オリエント地方にもひろまり、早く隋唐時代の中國にもたらされ、奈良・平安朝の日本にも知られていた。この藥はヨーロッパにも傳えられて、十九世紀末ころまで存在したやうで、わが國ではずっと最近、昭和二十年ころまで製造されていた形跡がある。ただしこの藥の實効については疑いがな

いわけではなく、一種の迷信的藥品と斷定する向きもある。にもかかわらずこの煉藥はユーラシア大陸の津々浦々にひろまり、二千年近くもの生命を保った。しかも當初にギリシア人が製造した材料や方法が、時間と空間の差を越えて忠實に傳承されており、このことに人間に共通の本性がひそんでいるのではないか。これが一一四頁に及ぶこの長大論文の要約である。著者は山梨縣の醫家に生を享け、醫學にもなみなみならぬ知識をもつておられ、私ごとき者の及ぶところでない。

ベルシア語の辭書を引いてみると、よく似た綴りで、*teryāq* と *teryak* の語が見える。前者がこの「テリアカ」である解毒劑で、後者は阿片という譯がついている。私でも阿片の方の語は知っていた。阿片吸飲者のことを *opiumist* という。手もとにある旅行記を見ても、一九五四年の岩村忍『アフガニスタン紀行』には「この男はマラングと稱するゴロツキ坊主の類で、いつもタリオクという一種の興奮劑をタバコにまぜて吸飲し、村から村へ彷徨しながらゆすりをして歩く者だそうだ。タリオクはクークナルという一種のケンの花から製するということである」と見える。この「タリオク」は *teryan* である。また一八六三年にトルコ人に化けて中央アジアを旅行したハンガリーの言語學者アルミニウス・ヴァンペリーの旅行記にも、ある男について「彼はテルヤキーでやくざ者だから氣をつけた方がいい」という忠告を受けたとある。

ではもうひとつの *teryāq* について私は思い出したことがある。

それは日本でもよく使われているベルシア語の文法書 *Ann K. S. Lambton, Persian Grammar* にいろいろ例文がある。

Tā teryāq az 'Eraq ārand, nār-gazide morde bāshad.

これは接續詞『』の用法の説明で引用されているもので、出典はサアディーの『ゴレスターン』第一章、第十六話である。蒲生禮一譯によれば「解毒の妙薬がイラクの國から届かぬうちに、毒蛇に噛まれたものは最後の呼吸を引きとろう。」前嶋論文によれば、イラクは西アジアで最良のテリアカカの産地であった由である。

私は *teryāq* と *teryak* の西アジアにおける現状について、何人かの人に尋ねてみた。まず日本に住むイラン人によれば「*teryāq* は解毒劑の總稱であつて、特定の薬劑を指す言葉ではない。その語は現在は日常に使用されることなく、ゴレスターンなどの文學作品に見えるだけである」とのことである。またイランに住む日本人によれば「*teryak* はイランではポピュラーであつて、量を限つて薬局で賣つてゐる。*teryak* を吸つたために長生きしたという老人もあり、*teryaki* という語は悪い意味ではない。一方 *teryāq* の語は一般に使われていないし、薬局に聞いても知らない」由である。さらにカールに住む日本人の調査によれば「*teryāq* と *teryak* の發音をいくら注意して質問しても、返つてきた答は後者についてであつた」と、ここでも *teryāq* の語がつとに忘れられてしまつてゐることがわかる。またこんなことも知らされた。Yūnani という言葉についてである。それは「イオニア」から來たもので、ユナーニーとは「ギリシアの」「ギリシア人」の意であると私は思つていた。ところがカールのとくに舊市街で、植物から薬を作る人、およびその薬のことをユナーニーといふのだそうである。まさに我が國でいう漢方醫、漢方薬に相當する。このカールの漢方醫はアラビア語で *ḥātib* と稱せられる。その人種の多くはタジク人かウズベク人であり、インド人も少くない由である。なお西洋的薬劑を

賣る店は *ḍawā khāna* と呼ばれてゐる。このような断片的な事實も、薬品の流通の歴史を考える上で、何らかの参考になるかもしれない。

以上、前嶋先生の数十年の研究成果の一部分について、氣まままな讀みを試みた。東西の豊富な文献が引用されており、教えられるところが多い。最後にこの論文集に收められている論文題目を紹介する。

漢民族のオリエント起源説

ヤクビー年代記中のトゥルク族

唐文化とイスラム文化

玄奘・ゲンゾウの辯

杜環とアル・クーフ

カスピ海南岸の諸國と唐との通交

タラス戰考

安史の亂時代の二二の胡語

黄巢の亂についてのアラビア語史料の價値

東西交通史料としてのアル・マッカーリーの史書

バグダードの文化とその滅亡

泉州の波斯人と蒲壽庚

元末の泉州と回教徒

閩書と閩書抄

忽必烈福裕副使博羅考

元代戰象考

日持上人の大陸渡航について

ゴレス攷

「ゴレス攷」補正

ゴレスについて

アラビア地理書の明代寫本の存在に就いて

アラビア醫學と中國醫學

テリアカ考

アラビア文苑中のインド

マルディヴ群島の産物

アラビア史と外來文化

アラビア人と咖啡

シリアと砂糖

サハラの鹽金貿易とアザライ(隊商)

アラビアとネジド馬

ヌーリー・シャアラーンと佐原大佐

オスマン・トルコとアラビア半島

Evaluation des sources Arabes concernant la révolte de

Huang Chao à la fin des T'ang

Mareo Polo's Forerunners to the Court of Qubilai Khan

美しき師弟

シルヴァン・レヴィと日本

空海入唐記

明清時代交通史の研究

星 斌 夫 著

昭和四十六年三月 東京 山川出版社
A 5 判 三八七頁

星教授はかつて「明代漕運制度の研究」(日本學術振興會、一九六三)という大著をものされ、そのときも筆者が本誌上に紹介した(二二卷四號)。今回の著書は、一方では漕運制度の清代への展開を明かにし、他方では前著と同じ明代において、官設交通機關という點で漕運制度と近い性格を持つ驛傳制度を考究するという形で、前著以後における研究をまとめられたものである。第二の問題が前篇「明代驛傳制度の機構と運営」五章となり、第一の問題が後篇「清代漕運制度の展開」四章となつて本書を構成している。ただし本書をまとめるにあたり、既發表の論文には増補・訂正などが行なわれているほか、前篇の第一章と第五章とは、全く新たに書き下されたものである。前著以後の論文はほぼ網羅されているが、ただ漕運關係では本書に収録されていないものとして、「清史稿漕運志小考」(岩井博士古稀記念典籍集所収)と「清史稿漕運志譯註」(山形大學紀要五一)の二篇がある。また卷末には、「清代の漕運圖」「明代驛傳路略圖」の二圖と索引・英文目次が附されている。研究以外の仕事に多くの時間を割かねばならない地位にあつた著者が、これだけの著書をまとめられたことに對して、まず敬意を表しておきたい。

(勝藤 猛)